

熱中症 Heat Attack

熱射病とは、高温多湿環境によって、体温調節機能が破綻し、異常に高い体温上昇(41~43℃)が起こった状態をいいます。高体温により細胞障害が全身臓器に及んだ場合は多臓器不全(MOF)の状態になります。臓器不全を生じさせる危険な温度は43℃です。

日射病は太陽光線の照射により皮膚と筋肉の血流量が増加し、相対的な循環血液量の減少と脱水による循環不全により起こる病気です。

原因

原因としては様々な高温多湿環境が考えられます。例えば、犬を車内や日の当たる室内に残したり、高温多湿環境でのシャンプー、ドライヤーの長時間使用、真夏の運動などです。その他として、ストリキニーネ、有機リン、塩化炭化水素、メタアルデヒドおよびサリチル酸塩などによる中毒。麻酔による悪性高体温症(麻酔薬により高体温を生じる遺伝性筋疾患)なども熱射病の原因として考えられます。

症状

症状としては、高体温、パンティング(ハアハア早い呼吸)、異常なよだれ、脱水、頻拍などが見られます。また、高体温の重症度および継続時間によっては、ショック、不整脈、呼吸困難、出血性の嘔吐および下痢、黒色タール便、尿量減少または無尿、発作、昏迷および昏睡、呼吸停止なども見られます。これらになると救命はかなり難しいものです。

診断法

普通の獣医師は見れば分かります。詳しく臓器の状態を見る為に、血液検査や血清生化学検査などを行い体の状態を把握する必要があります。その他、状況によっては、レントゲン検査、血液凝固検査などを行うこともあります。

治療法

この病気(事故?)は時間との戦いです。早期に発見し早期に対処すれば救命率は上がります。

まずは体を冷やすことです。冷水や冷風、アルコールなどを用いて体温を下げる治療します。

その他、全身の臓器の状態に応じて、点滴や様々な薬剤(抗生物質、ステロイド剤、抗癌剤、利尿剤などなど)を用います。

この病気は、通常、入院、集中治療の必要な重篤な病気となります。

自宅での看護法

熱射病の症状が見られたら、まず、体温を測り、41度以上あるならすぐに冷水をかけ、扇風機などで冷風を当てて、獣医師に連絡して搬送します。

体を冷やすときには40度になったらやめます。それ以上冷やすと今度は冷やし過ぎで低体温症を招くからです。

体が冷えると回復したように見えますが、その後容態が急変する事もあります。自宅の処置だけで安心しないで必ず獣医師の診察を受けてください。

予防法

熱射病は病気というよりは事故です。それもほとんどの原因は飼育者の不注意にあります。

犬や猫は人間のように汗をかいて体温を調整することができません。ですから熱射病や日射病になりやすい傾向にあります。そのため、夏場は特に高温な車内や室内に野外に置き去りにしない、散歩や運動は日中は避け、日差しの弱い、早朝や夕方～夜行うことは常識です。

また、日頃から状態に注意して、パンティング(ハアハア早い呼吸)、異常なよだれが見られたら熱射病を疑い、すぐに対処することが重要です。

さらに、夏場は、十分な休息、水分補給を行うことが必要です。動物病院には動物用の電解質補給剤(電解質サポート:ウオルサム)などがありますので、それらを与えると脱水の予防になります。

メモ

犬では特に、バグやブルドックなどの短頭種と言われる犬種はなりやすい傾向にありますので、日頃から注意が必要です。また、年齢が若いとか、高齢である。心臓病や甲状腺の病気があるなどの場合も起こりやすいとされていますので注意してください。

人の頭の高さに比べて地面は照り返しなどで1~2度も気温が高いとされています。ですから、子供や動物は特に日中の行動は避け、日差しが陰ってから行動することが重要です。

熱射病は、後遺症として神経障害および腎原発性尿崩症を発症することがあります。また、非可逆的な体温調節中枢の障害が生じることもあり、高体温を再発する傾向が高くなります。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..